美学綱要

第一巻

特別
イ4
3152
53

14
3152
53

95-110

二 單曲線は美感に於ける運動を表示するを既に説きしが如し不等辺多角形が等辺多角形となり不等辺多面體が等辺多面體となるが如く多くの直線が集りて一條の折線となり更に進みて單曲線となる此の如く線て直線が無數に折れて際限なき時は曲線を成し又非常に多くの辺を有する等辺多角形は殆んど圓形に近し

建築に應用せられたる曲線を見るにゴート式の穹窿は稍尖りて高くチユードル式の穹窿は稍平かにして両式の形状異れりと雖とも其間の轉化[illegible]の状況は恰も鋭角二等辺三角形が鈍角二等辺三角形となれるが如し

更に進て尖れる部分が全く扁平となりて羅馬式の圓形穹窿となるは恰も等辺多角形より轉化して圓形となるが如し此に於て吾人は直線より轉化して曲線となれる順序を知れり總て直線は單一態を代表し曲線は無窮なる複多態を代表すといふべきか『靜止』は不變態にして『運動』は變化態なるが故に直線は靜止の表號として常に不變不動態なり又曲線は運動に於ける速度の變化を表す而して速度の變化は無窮の複多態を成すと雖ども畢竟『振動』の大小に由りて起るものなり若し一條の直線を取り其一端を固着せしめ他の端を振動せしむる時は振動の跡が曲線を成し振動力大なるに從ひ曲線も愈大なり又振動微弱となりて其跡より成れる曲線が殆んど直線に近き時は精神上に感受する運動の印象益〻減じ遂に振動止むに及て全く靜止の印象となるなり

振動に種別あると共に曲線にも亦種別あり

單曲線が多數の連結さるゝ時若し其彎曲の方向を異にして向背相連れば圓を成さずして波狀線となる又茲に振動の跡より成れる曲線の彎

曲は或は半圓を超るものあり弱き振動の彎曲は直線に近きものあり一を剛の標號と稱し一を柔の標號と稱す而して通常の波狀線は最も強き振動と最も弱き振動との中間に於ける諸種の振動が連續せるものなりホーガースの著せし美の分拆にては波狀線を以て美性を具ふる線なりと説きしが此説は稍一方に偏したる嫌あり何となれば總て規則正しき線を適當の地位に置けば夫々特殊の美性を具ふべしと雖ども若し之を不適當の地位に置けば反りて醜となりて現るべきが故なり種々の振動より成れる曲線が波狀線を成さずして中より漸々外に擴大するときは渦狀線となる之を單純なる波狀線に比すれば稍複雜なり又曲線が渦狀をなしつゝ其波が在来の方向を取りて圓形に還らんとする傾を以て進むときは螺線となる螺線の彎曲は同一平面上に在るものと圓錐體を圍繞して成るもの（圓錐螺線）との二種あり上来挙げたる螺線渦狀線等の諸曲線は自然美及藝術美の範圍に於て重要の位置を占むるものなり自然美

に就ていへば樹枝に附着する葉の位置は相互交代し螺線をなして進み藝術美に就ていへば希臘イオニア風の建築に見ゆる柱頭は蝸状線をなせり若し又單曲線が平行の距離を保持して圓柱の外周を圍繞することにも亦螺線を形成す（圓柱螺線）然るに波状線が時々異れる方向を取りて進むことは波の高低或は山の如く或は谷の如くなるか若し同一の方向を取りて山谷の高低なきことは曲線は進行するに従ひ遂に其初に還元して圓形を成す（恰も渦状線が変じて螺線となるが如し）

圓形は一曲線に圍まれたる平面にして最も單純なる整正形なり其圓周は絶對的運動の観念を表出し其圓心は絶對的不動の観念を代表せり即圓形全體より見れば動の中に不動ありされば或る速度を以て不動の中心を回轉する圓板は一見靜止せるが如く見ゆるなり圓周は出入なくして平等なるも若し之に差別の要素が加り来りて弧線が平等性を失ふことは圓形よりして種々の形を生じ其曲が一定の規則

ニ従ふものあり其中最も著しきものは楕圓卵形（卵體の縱斷面）、滴形（滴體の縱斷面）の三種なり。楕圓ニは大小二種の直徑あり、この直徑の長短ニよりて種々の楕圓を形成す。楕圓の兩直徑が漸々均齊ニ向ひ遂ニ等一となるときは圓形となり小直徑が漸次緊縮して遂ニ一點となるときは直線となる。卵楕圓が變化する限界は圓形と直線との間ニ在るなり。但自然美藝術美の範圍ニ直線ニ楕圓形の應用せられたるは甚だ稀なり。次ニ又楕圓の兩直徑の中ニ就て短き直徑

が保持せる部分ニ特殊の曲線加はれば形は一變して卵形となる。卵形は楕圓ニ比して形態の複雜なるのみならず、遂ニ高等の美性を備ふ。自然美の範圍ニ就て見るニ總て有機界ニ於ける生物胚胎の外包は皆卵形なり。即植物の種子の如き、動物の卵の如き、皆然らざるはなし。又藝術美の範圍ニ於ても、之を見る。特ニ美術的ニ製造したる器具ニ卵形をなすもの頗る多し。無機界ニ於ては其物質の重量概して有機物より大なるを以て、卵形は一變して滴形となる。而して滴形の一

端が殊ニ突出するは、物質の凝聚力と重力とが反對の作用をなし、形の一部分が上方ニ引上げられしニ由るなり。物質の凝聚力が重力ニ勝つ時は、滴形は益々圓形ニ近似せる形を取り、重力が物質の凝聚力ニ勝つ時は滴形は益々尖るべし。重力殆んど其力を失ひ、凝聚力専ら作用する時は滴形の重量は空氣よりも輕く、恰も石鹸の泡の如くなりて其尖端を失ふと共ニ空中ニ飛騰するニ至る。

上来主として平面形ニ就て論ぜしが、此等の平面形は皆立體の断面と見做さるべきが故ニ、今や立體ニ就て之を論ぜんとす。直線形たる三角形、四角形が立體たる三角錐體、立方體を組成せるが如く、曲線形たる圓、隋圓、卵形、滴形が立體たる球、隋圓體、卵體、滴體を組成す既ニ述べしが如く、圓形が絶對的運動を表示すとすれば、球體もまた有らゆる方向ニ於ける絶對的運動の標號なり。而して、有らゆる方向ニ於ける運動は、外来の運動が共同作用することなくんば絶對的運動と共ニ絶對的不動ある圓形の説明よ

りして推知せらるべし諸種の形體に就てその美的價値を考察せしが次に此等諸形體の間に如何なる關係ありて美感を起さしむるかを論せんとす。

第二、形の調和論

（形の調和論）は諸種の形が相互に協同して美となるべき法則を論究する部門なり。形の標號論に於て説明せられたる個々の形は形の調和を保持せる組織體中の一員となるのみ。次に來る問題は吾人に美感を起さしむるには此等の形が如何なる方法にて結合するか。美の標準如何といふに在り。此に至りて吾人は色の調和論に於ける調和の説明を其儘應用せんとす。色が調和して美感を起さしむるには個々の色に非ずして二色又は多色が配合の關係するによるなり。形の調和も亦此の如く個々の形に非ずして諸形の配合關係によりて起るものなり。而して諸形又は諸色が終始同一にして變化なき時は不調和を生ず。此等の色形其物は決して醜なるに非ずと雖ども諸形諸色の間に配合調和を欠くを以て醜となるなり。今不調和の

議論を措きて調和の觀念に就て專ら說明せんとするに先に色の調和論に於て調和の一般概念を說明せしが直に之を取りて形の調和に應用することを得即調和の概念は各部分の完全なる有機的統一としての「全體」と其有機的分員としての「差別」とを豫想す故に一般に亘れる調和の標準は全體と差別との兩面を考察して後始めて一定すべきものなり今この調和の標準を配列して四とす曰く合律性、曰く齊對曰く比例性、曰く對稱。

合律性

(イ)合律性は最低の標準なれども最も普通なる標準なり又形の標號にも形の調和にも合律性を認むべきを以て其向の過渡となれるものなり。直線、圓形、球體、卵形等の如き個々の形は一定の「規律」の下に支配せられ此規律を脫する時は其形を保持すること能はず而して諸形の相關連絡が調和せられて美となるは必ず一定の規律に支配せらるゝに由るなり此間に於ける最單純なる規律は「均等」「類似」「符合」是なり均等とは內容が一致し形式が相異れるをいひ類似

そは形式が一致し内容が相異れるをいひ符合とは内容形式共に一致せるをいふなり二の形状物符合して唯だ空間上配列の方向順序を異にして反對に向て並ぶ時は之を齊對といふ吾人の實像と鏡面の映像との關係の如き即是なり

(ロ)齊對

齊對は兩形を組成する各部分が相比例し唯だ空間上配列の順序を異にして反對の方向に並び兩形相對向する關係をいふ吾人の實像と鏡面の映像との關係の如き即是なり。此の如く各相當の部分が反對の方向に配列せらる、時は同時に直觀せられ兩形が靜止的に對向すべきを以て齊對には運動を表示する要素全くなし。若し運動せる諸形が齊對をなすと言ふ者あれば、誰か其愚を笑はざる者らんや。例へば音の樂譜の如き戲曲の如きは其諸篇章を擧げて全體を一時に寫象せらる、ものとして、假に其篇章の間に齊對の關係ありといふことあるも是れ固より齊對の本義に非ず。若し其篇章が順次次第を逐て寫象せらる、ものと

すれば斉對の関係あるをなし。元来『斉對』とは
形の諸局部が相互比較せらるゝ場合に名く
る語にして継起的に順次顕現する諸形に名く
べからざればなり。即斉對には固定不動の意義
ありといふべし。之に由て斉對或は自然美藝術
美の範圍に於て最低の階級に位する形態の間
に見ることを得。自然美に於ける器械態（例せば鑛
物の結晶）及藝術美に於ける建築態の如き皆
斉對の関係を備ふ。建築態は啻に建築のみ
ならず其他一切の美術界に於て見るべく最も

等の形態なり。更に進で發展運動の法則に基き
斉對の固定性を打破し、圓轉自在に之を考察す
る時は一層高等なる原理の活動するを觀知る
べし。

（八）比例性　二形が符合するも空間上配列の
方向順序を異にして相並ぶ時は之を斉對と名
けたり。若し此の二形が更に大なる差別性間に
於ける外形上の差異に加ふるを以てすれば
二形は遂に符合することなきに至るべし。然るに
此の差別性と共に全躰に亘りて比度の均等を

保持するが故に或は二形の各部分相互の関係に於て或は其の各部分と形の全躰との関係に於て何れも適當の比度を失はざるなり此の理由によれば比例性といふも諸形の間に斉對の関係全くなきに非ず例へば人躰又は高等動物の躰を中央より縦断し各半身に手足一本づゝあるときは両半身互に斉對の関係をなすのみならず其各半身に付属する手足は所属の半身のみに就て既に比例性ありといふなり此の如く比例性は本来有機躰に具備するものにして斉對に比すれば尚一層有機躰に適切なる性質たり若し比例性の上に斉對の関係が加り来るときは更に多様的美性を具ふる形態となる手足の斉對に配列せらるゝが為に生ずる美性は常に建築態の境に在るを以て有機生活に必然なるべき運動性を欠く故に古代埃及の諸神像の如きは總て他の部分が比例性を保持すると雖も手足の配列が斉對的なるが為て神像の姿勢は特殊なる固定不動の外観を呈し活動なくして死せるが如く恰も建築態の性質を表示せる

に過ぎず。
斉對より一歩を進みて比例性となれば、外形のみの一致は消滅せん。即ち一致せる部分を器械的に配列する上に、自在性の要素を附加し来りて固定的の一致性は、一變して流動的となる。而して其流動ある所以は、正確なる比度の均一あるに由る。特殊の形躰に就て必ず比度の單位に差別ありと稱し、古人既に此の説を唱へたり。人躰諸部の比例、即ち身躰の諸部分相互の間に於ける関係、及び身躰各部分と全身との関係は、共に一定の數理的関係にて之を説明するを得と唱ふるが如き（レオナルド、ダ、ヴィンチ。アルブレヒト、デューラー。ゲ、フォン、シヤドー。等）是なり。
此等の人々は有機躰の各局部を以て單に量的に定められしものゝ如く誤解せるよりして、かゝる説明を唱へしものなり。而して有機躰の観念は本来性的なる形躰原理に基づく又此の形躰原理は數量的関係を離脱せり。身躰諸部に於ける比例が男女によりて異る所以は其の本質上既に身躰機関の性質に差異あるに

由る。又一般に之を言へば一般人類の比例性は一般人類の『理想』と異る所あり。故に美術専門の学に於て『人躰比例論』の必要を見る。而して人躰比例論は一般人類に就て論ずるを以て其原理に絶對的價値ありとする時は全く迷妄に陥るべし。

前陳の如く斉對にては符合する二形の部分が方向を異にして相並ぶものとす。此の如き斉對をなせる両形の群ありて数對の斉對が重複し而して各對の中に在る形に大小の差ある時は重複せる斉對といふ。例へば建物の中央の入口より左右に形を異にせるものが斉對の順序をなし等距離に配列せらるゝの類なり。此の種類の斉對は既に比例性の性質をも兼有するものなり。殊に家屋の前面に於ける戸が二枚の翼ありて中央に相合するが如く總て一中点に此の配列を成す時は明瞭に認めらるべし。人の顔面にて之を言へば鼻と口とは即ち此の斉對的配列をなす。而して鼻には左右二孔あり口には上下二唇ありて各々斉對的の部分を有す。總

じて此種の斉對的諸方面の連関によりて、器械的配列も漸く人躰の配列に近似すと雖ども諸部分の統一連結は未だ完からず要すると斉對には相對する部分が唯だ配列順序を異にするのみにして両部分は全く符合するも比例性ことは必ずしも符合するを要せず。

(二) 對稱

對稱と比例性との関係は恰も比例性と斉對との関係の如し。斉對より比例性に進めば空間上に循環する列序をなすが如く運動の性が加はりて比例性より對稱に進めば比例性に於て重要の性質たりし比度の等一は消失せて流動自在の性を有するに至る而して其の進歩は一定の規律に従へるが故に其進行の中に現はる、運動は律動的となるが如く律動的に直観に現はる、調諧せを『對稱』と名づく。されば對稱をなせる諸形にては個々の形が多く集合するとも斉對をなせる諸形の如く静止的に非ず。又比例をなせる諸形の如く現実上に各部分の結合あるが為に不動なるに非ず。諸形が律動的結合をなすと同時に個々の形に自ら統一性あり。

諸形相互の間に懸隔あるも、個々の形は常に
自ら一組織をなすを以て、律動の関係ある諸形
には理想的運動の性質ありといふべきなり
斉對より比例となり、比例より對稱となる等總
て調和の諸形式の間に於ける階段的進歩ある
を知り、此處に始めて天然美及び藝術美の範
圍に亘りて階段をなして亢進する運動性ある
を知るべし。天然美に関する方面の説明は次節に
詳論すべきを以て之を省き、今藝術美に就て之
を見るに、空間的藝術（同時的直観の藝術）の範
圍に於て、建築的より彫刻的となり彫刻的より
繪画的となる進路は「斉對的調和」より「比例的調
和」となり、「比例的調和」より「對稱的調和」となる進
路と一致するものなり。即階段の進むに従て労
等の段階に在るもの、原理は漸次その勢力を
減却すべし。例へば多数の人を画ける一幅の画
には「對稱」が主要なる位地を占め、人々の諸形像
の間に調和の関係あり、次に個々の形像に於ける
「比例性」を以てすれば、形像は既に理想化せられ
て唯だ假象となり了れり。更に此の理想的比例性

を以て論ずれば埃及の三角塔の如き團總て『斉對』をなす建築物全躰と雖ども殆んど理想化せられて假象となり了らんのみ。之と同じく彫刻にても多数形像の群集する時に律動的集合を成すといふことあり。是れは現に形像の間の差等が一定せるを指すものなり。繪画にては全然理想化せられて純然たる假象となるなり。又建築物が中央より両翼に斉對をなして開展せるをも時々名けて『律動態』といひ或は『對稱態』と言ふこともあるも固より其本義に非ず彫刻繪画に用ふべき語にして建築に名くべからざるが故なり。時間的藝術即ち『継起的直観の藝術』に於ては其中に在る運動の為に自ら理想的の性質を失て現實的實際的となり律動も亦全く實際的となるべきなり。『音楽』より『模形術』となり『模形術』より『詩』となる進路は律動が益々具躰的の形態を取るに在りて殊に戯曲には具躰的の印象を現出するものとす。

『律動』とは『合律的運動』なり。律動は恰も繪画に於ける『色調』の如く音楽に於ける『音調』が一定の

規律を踏みて運動なるをいふなり。律動の性質如何によりて繪画と音楽との別を生ず。繪画の如き空間的藝術には理想的律動あるも、音楽の如き時間的藝術には実際的律動あり。されば、繪画の「色調」を「色の流動性」と名くるが如く「律動」を呼て「形の流動性」と名くべし。而して「色調」が色の空間性と時間性との過渡に當れるが如く「律動」は形の空間性と時間性との過渡に當れり。吾人は時間的自然美の要素を論ぜんとするに際して、一言以て空間的自然美の両要素の結合点に

論及せざるべからず。

第四　色と形との結合

凡そ物あれば必ず色あり。色と形とは常に離るべからざるを以て、吾人は唯だ抽象によりて之を別々に考察するのみ。其體は即一なり。單に或色又は或形が果して「美」なりや否や等の問題を如何に研究するも、畢竟抽象的の議論たるに過ぎず。色と形との結合関係を研究するに及びて始めて美性の具體的の意義を知ることを得べし。今其理由を説明せんに、色の醜なるが為に反て

其形の美を損じ、或は形の醜なるが為に反て其
色の美を害す而して美なる形體と美なる色と
が結合するに至りて、色と形と相互に其美性を
増長するなり然るに色と形との結合が必ずし
も益々美なりといふべからずして色形の結合
の為に反て益々醜なる印象を生ずることあり。
是れ如く或は美なる形を有する物の本性が其色
に相應せざるが為に、或は美なる色を有する物の本性が
其形に相應せざるが為に、色と形とが不適當
の結合を成すに由れり。例へば美なる顏容を

画きせ塗るに蒼碧色或は濃緑色を以てすれば成
美顏一変して醜貌となる然るに色と形とを
分離すれば其形の美なるが如く、蒼碧色と濃
緑色とは何れも色として甚だ美なるを得べ
し此の美なる色と美なる形との結合が醜とな
るは不適當の配合なればなり又薔薇色或は青
紫色の如き美色を用ひて猿猴の背影を画けば
美色の為に猿猴の醜貌容は比較上益々醜き外観
を呈す此の如く色と形との結合上に於ける矛
盾の起るは客観的動機に在りと雖ども深く之

を追求すれば其根本は主観的動機に在りとす。即直観する主體の感覺以外に出ることなし。例ば美なる形と美なる色とを用て蛇を画けば色形の美性は寧ろ吾人に不安の念を起さしめ『醜』の印象を生ぜしむべし。是れ即先に蛇の有毒有害なる性質あるを記憶し蛇の画を直観すると同時に此の観念を再生せしむるに因れり。其他此種の實例一々枚挙するに遑あらず。

色と形とは空間的自然美性の要素なり。吾人の美的直観の範圍は廣大にして其中に在る事

物に種々の差別あるは色形が空間的なるが故なり。然れども色と形とに因りて空間的に自然の美性を寫象するのみにては未だ全く自然美性の本質を盡さず。自然は活動的なり。活動的なる自然の美性を寫象するは色と形の如き静止的の要素を以て足れりとせず必ずや活動を認むべきなり。實に吾人が自然現象に對して同情の念を有するは自然物を活動するものと認むるが為なりに因る即活動性は自然を寫象する標準なり基礎なり。

色と形のみにしては活動を表する要素なくんば色形の配合により能く自然の美性を寫象するとあるも、生命活動なき死せる自然物と認らるべし、畢竟是れ空間的存在として自然物を寫象せるが故なり。若し時間的の要素を加へ時間上に亘れる存在として自然物を寫象すれば直觀に映ずる自然は「生命、活動」を備ふ。自然を寫象するに就て必要なる時間的要素は必ず空間的要素に類似するなり。即「色」としいへる空間的要素に對して「調」としいへる時間要素あり「形」てふ空間的要素に對して運動てふ時間的要素あり

乙、時間的自然美性の要素

上来論ぜしが如く、律動は空間的直觀の範圍より時間的直觀の範圍に移る過渡なり。抑空間的美の中に階段を追て昇進する運動ありて初は理想的にして「律動」なるも、次第に進みて遂に現實的となり、實際に振動の形を取る。空間的直觀の範圍に於けるが如く、時間的直觀の範圍に於ても、均しく昇進する運動の法則に従ひ、一定の階段をなしつゝ開展し、抽象的現象より進て

具體的現象となる。此の階段の中に於て第一段は最も抽象的にして此振動は單に微振のみ。微振は未だ究分外部に見るべからざるものをいひ人身の脈搏の如き即是なり。空間的直觀の機官たる眼、時間的直觀の機官たる耳は共に此方面に作用し。眼は以て空間的なる微振をも視るに足り、耳は以て時間的なる音響を聞くに足る。音響は必ず實際的運動なれども、其運動は尚抽象的形態、なり、内的動性なり（第一段）此の内的動性が漸次開展にして具體的となり、現實上の急速運動となる。即内的動性より外的動性の現象となる（第二段）次に内的動性と外的動性とが同時に表象せらる、時は、動物す音聲となり又は有意運動となる（第三段）更に進で複雑なる時は、心的興奮を意識的に表示する形となる、言語、擧動是なり（第四段）此に於て吾人は自然美性の範圍より精神美性の範圍に入れり。而して此等の諸要素の結合せるものあり。即空間的自然美性の要素と時間的自然美性の要素と共同連合し、加ふるに高等の精神作用を以てお[illegible]るもの是なり。例

せば心に深く感動せる時に顔面に赧色を帯び、
或は蒼白色を呈するが如き是なり。

第一 音調

眼は外界知覚に最も縁近き機官にして色形
によりて物を知覚す。而して色形は其物の假象
に過ぎざるなり。耳は眼に次て外界知覚に縁近
き機官にして物の内的性の印象を知覚す。而し
て此印象は假象に過ぎざるなり。此假象は物の
内的性が現象となりて顯現したるものにして
即音調なり。之を運動の為に生ずる假象の初階
段とす。「ヒユー、ヒユー」と吹く風の音、「ザワ、ザワ」
と鳴る波の音、「ピン、ピン」と鳴る絃の音の如き無
生物の音は皆なり。音に無生物に限らず、獣類の
如き人類の如き有機生類には内的性を外部に
発表する為に別に特殊の発聲機官ありて之を第
二階段とす。次に発達最も發せるは言語にして
人類が之に由りて自己の意志を自由に発表す
ることを得るなり。下等動物にても尚ほ内的性を
有し特殊の構造ありて外界の刺激を蒙る時は
受動的に一種の音調を発することあり。總て音調

は生物の内的活動性を表出せるものなるが、之を無生物にも及ぼして嵐の「叱咤」雷の「赫怒」大砲の「叱喝」等の形容を用ふ。此の如く音調の性質上廣く有機界無機界に亘りて顕はる、ものなり。無生物たる絃の振動の如き、生物たる聲帯の振動の如きは皆音調を生ずる構造なり。要するに「音調」とは總て器械的振動の結果又は其形式なりといふべし。

茲に「音調」といふは單に廣義にて音響といふに過ぎず其本義たる規則的振動をいふに非ず。

不規則なる音響を「噪音」といひ、多くは無機物の発音なり。忽ちにして起り忽ちにして滅する「急音」は皆之に属す。風の吹く音、波の打つ音等をいふ。

又普通には音響と聲音との別あり。無機物の発する音を音響といひ、有機物の発する音を聲音といふ。「ガラ、ガラ」「ザワ、ザワ」「ドン、ドン」「チン、チン」「ゴロ、ゴロ」「ヒュー、ヒュー」「パチ、パチ」「カン、カン」「キー、キー」等總て言語を以て充分に言ひ顕はされざる内的活動性の顕現の如き或は「ニャーオ、ニャーオ」「チウ、チウ」「カー、カー」「ワン、ワン」等の動物的

聲音の如き、音響の表出によりて、種々の性質を示すものといふべし。

此の如き音響及聲音は何れも一定の規則に從はざるものなるが若し一歩を進る時は一定の規則的振動をなし『音調』となるこれは振動する物躰の構成が全躰同質なるを其振動を記さしむる勢力が物躰に比例的に作用するとに在りかく勢力が物躰に比例的に作用する前には、少くも必ず規則的振動をなさしむべき衝動の打撃なくんばあらず。然るに吾人は種々の媒介を經て始めて之を感ずるなり。人あり絃を彈けば絃の物質的振動起りて、彈力性を有する空氣は之が爲に波動を生じ、人の聽神經之を受けて音響の知覺あるなり。されば眼が光線の縁を借りて色形を知覺するが如く、耳は空氣の縁を借りて音響を知覺するなり。

音調に高低、強弱の差及び音色の別あり。音調に高低あるは一定時間に於ける振動數の多少に基き、音調に強弱あるは振動波の高低に依り、音色に種別あるは振動する物躰の構造如何に

在りとす此の三者は音調に差異を生ずる原由要素ともいふべきものにして種々の音調あるは三者の結合に種別あるを以てなり即音調の高さは同一なりとも強さと音色とを異にするより高調に変化あり種々の又音調の音色は同一なりとも高さと強さとを異にするより音調に種々の変化あるが故なり波の大小長短計るべからず又物躰の硬軟疎密その別甚だ多く殆んど無限の等差あるを以て音調の性質とも無数の類別あり(但人類の聴覚に感ずるは七「オクターブ」より十二「オクターブ」半までの間の音なり)而して音楽の美的性質は實に此處に存す又種々の音調をして好配合をなさしめ「調和」とならしむるには所謂音調の三要素の中に就て殊に音調の高低が最も主要の位置に立てり而して音調の高低は振動数の多少に基くを以て全く数学上の関係に在りといふべし即某音調の振動数を一とすれば之より次に高き「オクターブ」に當れる音調の振動数は二にして其比例は一：二なり又之より次に低き「オクターブ」に當れる音調

の振動數は二分の一にして其比例は一：二となり此の如き比例に當れる兩音は普通に同文字を用てその標號とし以て振動波の終點が第二の振動波の起點に一致するを示す。かく互に「オクターブ」に當れる二音を同時に聞けば調諧を感ずべしと雖ども若し之に反して振動數が二：三或は三：四の比例となるべき二音を聞けば調諧を感ずることなし。是れ一音波の終點が次の音波の起點に一致せざるに由る。總て同比例をなす諸音を同時に鳴す時は耳に調諧の感覺あり。而して振動波の數的關係が同比例より遠れば愈々不調諧の音調となるべし。詳細の理論は音樂上の調諧論に於て之を述べんとす

空間的直觀の範圍に於て、器械態より有機態となり、更に意識を有する精神態となる發達の次第は既に説きし所なるが、音調の發達も亦之と均しく、無機物の音響より動物の聲音となり、更に進て思想を表出する言語となる。總て此の如く多様の形式ありと雖ども何れも運動の表象たるは即一なり。而して是は全く物の内的

性に属す。音響を発する者は夫自ら鳴るものにして、若し外的現象の動性が之に加ることあるも別に変化せらるゝことなし。例へば暴風の喧囂に加るに隠雲の急奔樹木の動揺を以てし。或は児童の啼泣に加るに顔面の緊縮を以てするが如き何れも喧囂たる暴風の音啼泣する児童の音に変化を及ぼすことなきなり。吾人が目を閉ぢ若くは戸を閉ぢて暴風の音を聞き、孩児の啼泣を聞く或は耳を塞ぎて暴風の為に動揺する樹木を見、啼泣の為に緊縮する顔面の運動を見る。

共に同一原因に依ると雖ども吾人が之を感受する結果は全く同一に非ず。されば吾人は物の内的性の外に外的運動を究めざるべからず。かくて物の外的運動のみを直観する時は既に物の内的性即ち音調の抽象的運動性を離れて、更に物の可見的運動(外的性)を観るに至るを以て、吾人は茲に時間的現象の第二形式たる具躰的形式を論ぜざるべからず。

第二　運動

音調論より運動論に入れば一見論述の順序

を先ひ、時間的直觀の範圍より再び空間的直觀の範圍に逆戻りせしやの觀あり。色形は、物を空間的現象として知覺すべき標徴なるが、直接に物の運動にて之を知るべからず。現象相互の関係によりて明瞭に之を知ることを得。又物の位置を變ずといふは、諸物相互の間に於ける関係の變化のみ。空間に於ける假象の變化のみ。之を時間上より觀察すれば所謂運動となる。今運動が時間的の本性を有することを辨明するに足るべき事實を集めて之を説明せんとす。(イ)我若し歩行する時は事實上空間の中に自動すと雖ども、直觀する主躰としては静止すると同じ。位置が變ずるといふは畢竟外圍の事物と自己との関係を異にするなり。(ロ)直觀する主躰が事實上静止するも、自動する對境との関係によりて、人が自ら動くが如く思ふは畢竟人に固有なる迷妄ともいふべし。例せば進行する滊船の船窓、急奔する滊車の車窓より外界を觀れば外界の事物は渦状の舞踊をなすが如き假現あり。是れ其適例なり。(ハ)二物相並で同方向に運動する時は

二物相互の関係恰も静止の如く見ゆ。例へば河水を進航する汽船あり其沿岸に同方向を取りて同速度に馳奔する汽車ある時は此船車相互の関係は静止の時に於ける同船車の関係の如し。

(二)直観する主幹は運動するも外界の事物は静止せるが如く見ゆることあり。例へば進航しつゝある汽船の甲板に在る人が汽船と同速度にて反對の方向に歩行する時、直観する主幹と沿岸に於ける對境との間の関係は全然静止の時と同一にして對境は静止せるが如く見ゆ。又錯誤の結果よりして事實上静止せる對境が動けるが如く見ゆることあり。例へば二列車並びて停車する時、自己の乗れる列車が發するに際して他の列車を見れば、自己の列車が静止し他の列車が動くが如く見ゆるの類なり。以上列挙せる實例によりて運動が直観上時間的の意義を有することを知るべし。

直観上の関係を問はずして運動を以て單に事實上空間に於ける位置の変化なりといへば、『音調』にも亦空間的運動ある所以を知らざるべ

からず何となれば音調は空間に於ける波動に因りて吾人の耳に達すればなり(一秒凡そ一千五百歩の速度にて)反響は音響が一たび或物躰に當り其抵抗を受け、音学的に一定の角度をなして反射し、以て吾人の耳に達す静止と運動との對立は空間的直觀と時間的直觀との區別あらしめ其基礎を成すものなるが又共起的直觀と継起的直觀との別を成す而して共に是れ直觀の機官(眼耳)及び現象の形式(空間、時間)に屬するものなり。

物の内的動性に劣等の段階より高等の段階に昇る進化あり即器械態より有機態となり有機態の中にも精神なき有機躰より精神ある有機態となる事物の外的運動の直觀にもまたこに類する段階あるを見る即ち雲の運行水の流走田野の麦浪の如き或は蛇の渦巻の平原を奔馳する獣類の飛走、空中に飛翔する鳶の環行の如き殊に顕著なるは動物の躍れる雍雅的運動又は滑稽的運動の如き夜會の舞踊に見ゆる男女一對の律動的運動の如き開歐風俗故意に

感情を表出する南歐風の舞踊の如き、進みては談話の間ニ思想感情を表出する戯曲的自由運動の如き皆運動の多様なる段階を昇進して順次ニ列挙せるものなり而して何れも直観の上ニは特殊の美的印象を成すものとす。

形式上運動の性質を論ずれば運動其物は純然たる直線的のものなり即ち其線は静止せる物躰の境界線と見做さる而して實際ニは物躰の運動する形式として更ニ明瞭なるが故ニ合律的なる運動は茲ニ直線運動と曲線運動との二種となる。曲線運動は又た單曲線波状線螺線橢圓抛物線等の數數ニ分たる而して此等諸線の結合は更ニ又運動の範圍ニ於て自然美の形式を成すものなり茲ニ運動線ニ區別ありて單一形式の美的印象と多數の形が相互關係するより生ずる美的印象との別を生ず前者は標號的の本性を有し後者は調諧的の本性を有す是は何れも同一物の諸部分の運動なれども現象上ニは諸異物の運動の如く見ゆ此の印象は概して調諧的なるが故ニ或は斉對の形となり或

は比例性の形となり、或は對稱の形となるべし。物の空間的成形の基本的形式と物の時間的現象としての内容の基本的形式との間に於ける平行は必ず二範疇を成す共起的現象の形式及び継起的現象の形式是なり而して継起的現象の形式とは時間的自然美性を指す此の両形式は共同作用して或は高く或は低く特殊の現象となりて直観の上に顕はることより一は色が加はり一は音が加はり来し

第二章 具體的自然美性

前章に於て自然美性の形式的要素を空間的現象（色と形）と時間的現象（音調と運動）との両方面より論究したりしが、此等の諸要素は自然美性の普遍的範疇にして、物の具躰的特性に非ず。此等の諸要素が共同作用する美的関係よりして、或は消極的の性質を帯びて自然美となり、或は積極的の性質を帯びて藝術美となり、根本的の区別を生ず。自然美と藝術美とは判然区別ありと雖ども、又互に相混淆するものなり。作

家が自然美を表さんとして、對境を擇ぶにも幾哈か藝術美性を包括せり。例せば、景色画にて所謂美麗なる地形は爽快なる風景に若かず、爽快なる風景は雜駁なる景色に若かざるが如し。又音曲にて、鳥の鳴く音、嵐の吹く音を奏するは、單に音調を以て景色を寫せる音調的繪画とも稱すべきものにして、精神の情調を表象する叙情的音樂に若かず。又他の方面より自然美と藝術美との區別を見るに、自然の活動性は直接に物を美的ならしむるのみならず、間接には其種族の

生活を繁殖せしめ持續せしむ。即、美は自然より見れば唯だ目的に達する方法のみ、而して此方法によらずして目的を達する能はざるなり。水棲動物の如き、具鱗類の如き、多くは婉麗なる色彩を有し、飛鳥の羽翼に斑紋並びて斉對をなし、其鳴くや妙音の歌を成し、其他精巧なる蜂窩、微(繊)なる蜘蛛の糸、皆是れ自然が具備せる合的性の動機に基かずんばあらず。客観的に自然を考察する自然科学は合的性の観察点より論じて生活を以て第一主要の要

素とせしが、自然を美学的に考察すれば稍之に異り、生活を以て自然美性の副次的の要素とするなり。されば観察点に由りて同一の現象要件を一方にて根本的と考へ、一方にて副次的と考ふるの別あり。即観察点の移動によりて同一物の價値を異にす。吾人が具躰的自然美性を考察するに當りては美学的観察点を撰ばざるべからざるも又之に由て確固たる自然科学的の組織を成すべからざるを知るべし。故に自然美の美学は自然の認識にも非ず自然哲学にも非ず。自然美性の單純なる形式を論究して複多なる自然現象に及ばんとするものなり。美の学問としての美学は、自然現象に必然なる関係を有する單純の形式を主眼として研究するものなり。されば若し此の單純形式を知り、直観によりて更に其作用の基く所以を知らば、美性の性質程度に關して自然現象を判定するを得ん。若し此の判定なくんば如何に美文を以てするも遂に自然美の真相を認識するを能はざるべし。

甲、自然の四大物素

火、空氣、水、地、之を自然の四大物素といふ。是れ古代より傳はりし分類法にして近世科学の排斥する所なり。吾人は地水火風が科学的の意義に於ける原素に非るを知る。「空氣」は酸素、窒素、炭酸瓦斯の混和物にして「水」は酸素と水素との混和物なり。火、地も亦混和物なるを知る。然れども吾人は現實的に地水火風を組成する原素を直観するを能はず。酸素、水素、窒素等も亦夫々混和して存在し、殆んど単純なる状態にて存することなきを以て、古人之を知らず、ラボアシエールの発見までは地水火風を四原素と認めたりき。

地水火風は有機無機の諸形躰となるを以て、其諸形躰は直観上には自然現實性となり、人々具躰的に四原素と認むるに至る。例へば「空氣」を以て地球を圍繞し音響を傳達する不可見の大氣と考へず、単に雲の形態、風嵐等總て大氣の可見的現象として空氣を知るが如く、海洋河湖として「水」を知り、山嶽平原として「地」を知り、日光、地光、電光として「火」を知るが如き即是なり。

吾人が地水火風の四大物素を考察するには

一定の距離に於てするを以て之が爲に種々の関係を生ず『光線』の源は太陽にして吾人は之を火の代表となす而して太陽は吾人を距る甚だ遠し空氣は地球を圍繞する大氣として稍人に近し地球上の水は陸地を圍て之を區分するものなれば更に吾人に近く吾人が踏みて立てる地は最も吾人に近し吾人は河海を航行し或は輕氣球に乘じて天雲に昇ることを得べし而して船舶氣球の準備なくば航行昇天する能はずと雖ども地上に立つには何の準備をも要せず最も吾人に接近せり總て『距離』の遠近は四大物素の現象形式に段階を與ふる基本となり之に由りて美學的に四大物素を研究することを得べし

第一、火

茲に火といふは燃燒作用に非ず光輝を發する現象を指すなり光線を指すに非ず其躰的に發光躰をいふ而して發光躰の最も顯著なるを太陽とす太陽の光線は大氣浮雲の影響を受けて地面に達し以て燦然たる自然美を發揚せ

り又太陽の東海に婉容を現はし或は西山に沒せんとして地平線に近づける時の自然美の如き殊に壯嚴なる山嶽雲霄の奇峰に反射すれば崇高の印象に加るに更に一層の美を顯現するものなり加之太陽の光線は地球上に於ける光明の源泉にして一切の事物及其形態をして明瞭ならしむ此に於て發光は光明の形となる然れども光明ある所為に自然の事物が必ずしも美なるに非ず自然の醜も亦光明の為に暴露せらるゝ事あり然も美を現すに非ずやかくして明瞭となれる積極的美的印象を直觀すれば一般に快感を覺へ自然界が直觀の上に現はる而して此世界は無色の世界に非ず帯色の世界なり人は絶す清潔なる空氣を呼吸して習慣となり遂に呼吸の快感を覺へざるが如く光明によりて生起せられたる快感も亦習慣となれるを以て別に之を特殊の快感として覺へざるに至れり若し長く闇黒なる獄舍に捕はるゝ者あり一朝赦されて青天白日の身となれば直に光明の快感を認知するといへる者も亦此類なり されば闇黒なる深潤

より再び浮び出たる少年の口を借りて「薔薇色の光の中に生活する者は幸福なり」と絶叫せしめしは日光を薔薇色に喩へたるは地下の闇黒に對して日光の快感を表出せるなり此快感は「喜悦」の性質を有し本性上既に美的印象に對して生起す之を自然の現象に比較すれば吾人日常の生活に於て積極的美的の性質あるものありて益々光明の結果を生ずることを見るなり日没以後の闇夜暴風の兆ある天候或は玲瓏たる月光の如きは共に消極的なるを以て之に比較對照すれば日光の光明は實に積極的自然美なりと言はざるべからず日光の快感を覺るは小說的の感情より來るものなりと雖ども美中に自ら詩的の意義あるを見るなり色形の不定なるは吾人をして自然の秘密なるが如く自然に心意あるが如く感ぜしむ而して是れ吾人が自然界より受くる刺激を感ずると因れりと雖ども畢竟するに積極的なる日光の光明と對して言へば消極的なり色形共に分明ならざる状態を「詩的」と名けしが小說的感情を起さ

こゝまでは日光を「散文的」と名くべく其光輝絶
かざるが故に遂に之を尊重するに至る。
此等の諸現象に就て日月の光は最も廣大な
る活力あり太陽は晝間萬物に光明を與へ積極
的の美的印象を起さしむるものなるが月
は地面と大氣とより共同影響を受ること及び始て
積極的の美的印象を人に與ふるものなり例へば
月将に地平線上に昇らんとして半ば其娩容を
露はす時は如き雲霄之景色その影響によりて
最も美景なり或は明月中天に懸り雲の為に半
は蔽はれて朧月となる時も亦美景となる。雲晴
れたる大空に懸れる月輪は却て皓たる一個の
圓板に過ぎずして美的興味あることなし。星辰の
光は稍之に異れるものあり星辰の羅列するは、
多くは天穹一點の雲を留めざる晴夜にして、列
宿の群集せる宇宙を直観すれば直に宇宙全自体
の無限性を寫象し、以て地面の如く有限性に非
ざるを認知し之に由て積極的美的の印象を発
揚することを共に崇高の念を喚起すべし。星辰の羅
列は此の如く美なりと雖ども曇夜一星頓に光

を放てば反て美的の写象を害するものなり。太陽の光線をして美的ならしむる要素は温熱を発射するに在り。温熱は觸覺の對象なりと雖とも、美感にも関係するものなり。温熱は自然の生物を活動せしむる原因にして、地球が一定の軌道を通過しつゝ一回轉するごとに或は太陽に近づき或は太陽に遠かり之が為に太陽温熱の差を生じ自然界の興敗交代を来す。是固より物質的の一面に於ける太陽温熱の勢力なるが、更に美感を起さしむる勢力なるを知るべし。白雪皓たる嚴冬の

候には自然の生物皆眠れるが如く春風一たび吹き渡れば自然界は活動を始め、三伏の盛夏温熱頻に加れば全世界は全身の勢力を発して大活動をなし、秋冷となり落葉乾々世界自然の衰凋を現はすに至りては全世界の活動衰頽し遂に生物睡眠の季節に還る。是れ自然界が太陽温熱の為に美的の意義を有すと称する所以なり。

日月の如き火光の外に北光、十二宮光、電光、電火、海水の光等ありて第二種の火光に属す。皆是れ崇高なる勢力にして其性質の奇異妖美なる

ニ由テ美的興味ヲ起サシムルモノナリ。第三種ノ火光ハ物質的火光ニシテ地上ノ火焔ナリ。火焔ニハ運動ノ要素加ハリ来ル運動ノ要素ハ既ニ電火ニ備ハレリト雖モ、電光ノ起滅甚ダ速ニシテ吾人之ヲ直観スルモ光線ノ運動タルヲ認識スルニ足ラズ。然ルニ焔ハ火光ニシテ蛇状曲線ヲ画キ殊ニ風ノ為ニ動カサルヽ時ハ美的快感ヲ生起シ電光ノ如ク恐怖ノ感動ヲ生ズルコトナシ。然レドモ市街ノ大火ノ如キ或ハ森林ノ火災ノ如キヲ見テハ生命ノ安危ヲ患ヒ財物ノ破壊ヲ恐ルル是レ美的現象ニ非ズシテ可恐的現象ナリ。故ニ焔ノ美感ヲ起サシムルハ破壊的ナラザル範囲ニ限ラルヽナリ。

次ニ挙グベキハ火光ト物躰トノ間ニ生ズル照映ノ現象ナリ。凡ソ物皆固有ノ色形ヲ備フレドモ火光ニヨリテ明ニ之ヲ照映スレバ更ニ一層之ヲ鮮別スルコトヲ得。光線ノ方向一定ナル一定ノ方向ヨリ来レル光線ガ物躰ヲ照映スル時光線ニ対スル物躰ノ一部ハ明白ニシテ光線ニ反対スル物躰ノ一部ハ闇黒ナリ之ニ由テ照映

されたる物躰を画くに陰影を表出するなり其他透明、鏡映、反射等の如きも亦照映の結果にして、自然の美性なりとす。然るに発光躰と照映さるゝ諸現象との関係よりして高等なる自然美を発現出するこそ甚だ多し。今一二の例を挙げて之を述べん。人あり、山嶽に囲繞せられたる湖水の岸に立ちて風景を眺望する一時恰も満月に際し、紅を帯べる月輪天に懸り、稍雲を被り、朧月となりて湖面に其婉容を映寫し、近く水邊を見れば水清くして直に底を透視すべく、軟風時に来りて小波を揚げ舟中の漁夫松火を點じて網を投ず、湖岸の鍛工炭火を燃して労役に従ふ。是れ一幅の畫景にして多様なる天然の形相を寫し出し、可愛的婉美を顕点に表示せり。之れより進めば遂に可恐的崇高の範圍に入るべし。

第二　空氣

○空氣は光線と同じく具躰的現象なり。即或は音響を傳達し或は地球を圍繞して大氣となり可

見的形態となる。空氣と光線との関係よりして種々の現象を生起し種々の色を成す。即黄色(例へば日光の橙赤色)と青色(例へば天空の紫色及び青緑色)との對立を来す。ゲーテが所謂『原始現象』是なり。地球を圍繞する空氣の積層よりて生ずる天空の濃青色は宇宙の無限性を感ずると共に一種の幽静なる崇高を覺え以て壮嚴の印象を喚起するものなり。畢竟是れ吾人が廣大無邊際なる宇宙に對して畏敬を以て之を見るに由るなり。空氣は本来純粋透明なるも其層重積するに及て一種の色彩を呈し加ふるに雲霧遥に浮揚して淡平の灰色を呈する時は崇高の印象は一変して陰欝厭倦の情となる。

上に述ぶる所は静止せる空氣の相状なり。今運動が之に加はり作用する時は更に見るべきものあり。霧は聚りて一團の雲となり風に動されて天に飛翔し空氣に活力あるが如き外観を生ぜり。或は颶風となり或は雨雪となり或は嵐となりて廣大なる自然力を発現して崇高の印象を深からしむ。かくして発せる崇高は静止せ

る濃青の天空によりて生ぜる壮厳なる崇高に比して其本性全く異れり。後者は單に空間的崇高の印象を起すに過ぎずと雖ども、前者は天然力の崇高の印象を起すものなり。空氣の運動が影響する所は之に止らず、尚ほ地球表面を包繞せる水面に作用して種々の現象を生ずるなり。

第三　水

吾人は光線に依りて色を視、空氣に依りて音響を聞く。水も亦此の如く感覺の對象となる。水は温熱の昇降に從て其形を變じ、或は稀薄となりて蒸氣となり或は凍結して氷となることありと雖ども、是れ水の特殊の形態にして水の通性に非ず。水の通性は液躰なり。水が液躰として流動する性質あるは平ならんとする性質あるに基づく。かく水が平均を保持せんとするは即諸々の水面を平均して次第に直線となさんとする傾向あればなり。而して地球は球状を成すを以て其結果は地球上の水面が弓形をなすを見るべし。吾人の視界は地球表面の一小部分に過ぎざれば、

吾人が見る所の地平線水平線は單に一直線な
るが如く見えて水の平均狀態を現すなり。然る
に、或は風雨の為に、或は河川の為に、地形に變動
を生ずる時は地球表面に複雜なる系統を發生
し、出入凸凹ありて為に諸種の活動を演ずるを
見る。—瀑布は平ならむとして流奔する水
流が斷巖に至り急に落下して白布を垂下す
るものなり。而して瀑布の美麗なる弓狀線は水
の平ならむとする本性と共に運動の相狀を表
現せりといふべし。

地球上に在る水の形態種々ありと雖ども其
分量と延長とに於て廣大無比なるを海洋とす。
遠く海洋を望めば水天彷彿として水平線と天
穹と相接する所に於て、兩邊に無限に延長せる
直線を認め、此處に吾人は空間的延長の無限性
を覺るを以て一種壯嚴なる崇高の感を起さず
んばあらず。是れ即靜穩なる海洋の崇高性なり。
若し夫れ颶風一たび起りて海波大に揚る時は
自然力の强大なる驚かしむるものあり。是れ
即自然力の崇高性にして動搖せる海洋の崇高

性なり。山巓の小湖は四圍山嶽を以て障壁を造らる、が故に颶風起りて水波揚るも雖ども之より生ずる崇高性は著しく制限せらる。若し又大氣靜にして山湖の水面波を生ぜず静穏の印象を起し加ふるに温和なる日光を以てすれば湖面の静穏は山嶽の高峻と相並び之を同時に觀察すれば自然美の崇高と婉美との合成を認知するに足らん。此の如く大河は崇高にして細流は婉美なり。江河の漫々たるは崇高の印象を起さしめ細流の涓々たるは婉美の印象を生すべきを以てなり。

水に関する美的現象には、大抵光線空氣の影響ありと雖ども、共同作用が必ずしも現象をして益美的ならしむるに限らず。時に反て美的價値を減殺することあり。例へば湖海に霧立つ時は、湖海愈美性を加へ来るも雖ども、又之と共に單調不變化の印象を起して、利害並立するなり光線が水面を照射すれば特殊の帶色を起し、透明なる水面に外物を映寫すれば美的印象を増進せしむるものあり。『映寫』は唯だ水の表面

ニ在るのみなれば水中を透視して其透明なるを知ることも映寫の現象を水面下ニ認むるなし而して水の帯色は表面のみニ限るニ非ず水面の帯色は本来空氣の帯色と山嶽樹木等の如き水面ニ映寫する外物の帯色とニ基づく山湖の水色が明瞭なる紫緑色を帯ぶるは一は水の素質ニ因り一は湖畔ニ繁生せる植物ニ因るなり總て透明映寫帯色等の如きは静止せる水の美的要素なりとす

第四 地

地球表面の美的考察は科學的ニ地殼の構成地球の發育を問ふものニ非ずと雖ども地殼を形成する材料の層段、形態等ニよりて美的印象の異動を生ずるあり山嶽谿谷等の如き空間的延長性を有するものニ對しては崇高の印象を得べく若し又地面の形状稍平ニして地面凸凹の屈曲線緩漫なれば自ら婉美の印象を起こし之ニ加ふるニ新鮮華美なる植物繁生すれば更ニ一層婉美とならん美景は山嶽谿谷平原の間ニ見らるゝもの多

し。山嶽谿谷は浮雲の成形に類似し平原は水殊
に湖海に類似す。平原曠野は地球表面の凸凹せ
る波線に一部分変状を呈して直線となりし處
にして恰も動揺せさる海水か一時波静なる為
に壯嚴的の崇高となるが如し。之に反して奇岩
高く聳へ或は山嶽重疊する時は浮雲の重積し
て互に奇峰を争ふが如し。而して狹長にして平
坦なる谿谷の如き或は鬱たる大森林を左右に
控へて其間に介在する一帯の地の如きは婉美
の印象に於て恰も緑樹の蔭を沈むる山湖の風

景の如し。
形の標號論に於て直線形曲線形の諸種は今
や實際に指的するを得べし。地球の一面に激
振突出高峻等あれば又一面には微振平坦落窪
等あり。之を個々の形として考ふれば固より標
號的の性質あるも之を諸形の集合として考ふ
れば調和的なるあり不調和的なるあり一定
せず。此を以て此等の印象を合同し全躰の上よ
り美的判断を下さゞるべからず即地殻の構成
（直観に顕はる）岩石の色彩植物繁生の種類の

如き、時に或は發光の種類の如きは、此判斷の標目となして、此等を合同一躰として「土地の風景」を論定するなり。

風景論の結論は廣く之を天然界の美的考察に適用せらるべし。即鑛物界、植物界、動物界を考察するに應用する所を得。「鑛物」は直接に地殼を形成し、天然美性の範圍に於ける進化の歷程に最低位を占め、「動物」は天然美性の範圍に於ける高位を占め、就中「人類」は最高位に在るものなり。

乙　天然美性の特殊形式

世界の事物は皆進化發達の歷程に在るを以て、之を一貫すれば劣等の階段より高等の階段に發達する順序を明にすべし。形式上より之を見れば直線性より曲線性に進み、又諸形式相互の關係より之を見れば齊對より比例性に進み、比例性より對稱に進む。是即形の構成に於ける普遍の原則なり。

第一　鑛物

地球上の鑛物は或は火の作用より或は水の作用によりて、現在の形態をなり岩石をなりて存在す。火の作用によりて成れる岩石を火成岩といひ水の作用によりて成れる岩石を水成岩といふ。火成岩は高熱の為に地中に熔融したる岩石の固結して成れる岩石にして皆一定の結『晶』を備ふ。水成岩は地下を循環する天然水が石灰等を溶解し砂礫の間に沈澱固結し地層の壁迫を受けて壁岩となり、或は土砂を沈積せる海底河底等の隆起して陸地となれるものにして、必ず層をなして存在す。故に水成岩は顕微鏡下に擦すれば皆小分子あるを知るべく之に反して火成岩は一定の法式に從て結晶し其形態多くは一定の平面を以て周壁を成し其境界は直線的なり又其配列は齊對的の順序をなして乱ることなし是即火成岩が特に天然美性の印象を與ふる所以なり。

鑛物の結晶が天然美を表現するのみならず、又鑛物は色彩を備へ結晶の表面光輝ありて鏡の如く透明なる寳石の如きものあり其他鑛物の

素質堅固にして之を振動せしむれば音を發しす。故に樂器の絃糸は鑛物の線にて造り、鑛物の絃音は有機性の絃音よりも遥に幽雅なる音色を發すべし。是亦鑛物の天然美性なり。

第二　植物

鑛物には運動の性なく生命なし之に離れて植物には運動の性あり生命あり。植物諸機関に循環する滋養液は常に運動しつゝあるなり。植物は根を張りて土壌中より養分を吸收し葉枝を出し、空氣日光に觸れて呼吸をなし、化學的に活動せり。此の如く鑛物は光線、水分、空氣、鑛物等の助力を受けて有機躰を組成し其間に統一を備へて個躰となる。而して植物の個躰は有機的成分の事情に從て変異するは勿論季候の変異に関して發達の順序自ら一定せるものあり。緑葉出で、花咲き實を結び冬季遂に眠り而して植物の季節に從て榮枯するは恰も高等動物等が一生の間に於て発生衰死する状態に類似す。殊に其中年に美的形態を発揚する植物の開花の如し。要するに動植物は美的基礎に於て生長発育

の歴程を同ふするものなり。
植物の要部は根、幹、枝なり。而して枝は葉、華、實を戴き美的印象を與ふる最大なり。植物種別甚だ多しと雖ども尤も特殊の美性あり。即ち熱帯地方の大樹の如きは崇高的美性を備へ、温帯植物は概して婉美的美性を有す。又植物の形態に就いて言へば植物の幹は直線的にして、樹葉の縁廓は曲線的なり。而して樹葉の位置は凡そ一定の規則の下に齊對をなし、又各部分相互の関係は殆んど比例性を保持するものとす。

植物を大別して喬木、灌木、草本の三種とす。喬木は最も完全に發達せる植物にして『有葉喬木』『針刺喬木』の二類あり。喬木は集りて『森林』となり、樹葉の翠緑は人の快感を惹き、樹幹は厳格なる性質を表出す。是れ針刺喬木は長く樹幹を露はし、直立せる柱形の樹幹に齊對をなし、附着する針刺と相並びて荘厳の印象を與ふ。之に反して、有葉喬木の樹幹は多くは屈曲して必ずしも直立せず、其枝は不規則に分岐し樹幹の形態千差万別なり。又樹葉は總て直線と曲線との

複合態ことりて其形を成せるが故に往々美術的の目的画の題目となり、建築上の装飾に用ひらるゝ之に由て有葉喬木は詩歌の中に加はり感情描写の補助となるなり。灌木は樹冠直に地面に接し幹を有せざる小喬木と見做すことを得草本は一層地面に接し多くの草本集りて地面を蔽ふことは地面の衣服となれるもの、如し更に最も地面に接するは雑草類苔蘚類にして鬱たる森林の樹木の為に氈毛を布きたるが如し。

喬木灌木草本は大抵接近集合し一は植物相互の関係上より、一は植物と地面との関係上より自然美を發現し土地の景色を形成す「公園」には樹木群生し其色形の美なることより、又芝生池沼道路等ある景色を複多的ならしめ調諧的の美性となる。森林の景色は單調にして陰鬱なるも山麓傾斜の地之に接すれば景色の美をなすことあり。例へば低き谷より高山に昇れる一帯に亘れる森林は平地の森林に見るが如く喬木の木立として直観せらる、とき全躰の地勢上より美なる景色となるべし。

花は美的價値を有す。景色画としての花景は甚だ美なりと雖ども、個々の花を画ける繪にして直に人の嗅覺に関することあれば其美的價値は著く減殺さる、之を以て花画は花景画に及ばざるものとす。果實も亦此の如く景色画の間に果實を結べる樹木あれば美的價値ありと雖ども、個々の果實を画ける繪は味覺を刺激するを以て著く美的價値を減殺せらる。

三　動物

美の形式の進むに從つて美醜の意識は益其明となり、同時に其反對なる醜の意義も亦明かに決定せらるゝに至る。物質界に於ては醜の形式は固未特存の意義を有することなし。礦物の規則的組織を有するは美なる稱すべけれども、不規則なりとて強ちに醜とは言いがたし。礦物組織の形式は素と植物よりも來るものにして、その數學的に規則的なることと相對的に均衡せることとなりしは高等なる動物

の比例正しく調和せらるゝに比すれば、唯その附随的命令たるのみ、未だ重要の條件たらざるはなり。

又植物の体形に於ては、各部比例的命令の主きに從ふものにあらねど、尚各部分の体形は偶然のる陸に剖除せらる、枝の方向、長短、強弱等の関係は單に風雨等の事情に因りてたゞ左右せらるゝものなり。

されど動物に於ては其形體、畸形のものならざる限りは、天然の身体組織に基くものなれば、自ら一定の形式ありて存す。されど

動物には正形畸形の別明かなれど、植物に於ては其の区別甚だ明かならず。從って美醜を定むべき標準明かなること能はず。或は植物を指して美といひ醜といふは畢竟主觀たるに過ぎず。之に反して動物に於ては必ずしも畸形ならずんば、全然正形なるべきものにも、醜と認めらるゝものあり。例へば、蝦蟇の如き、クロコダイルの如き是れなり。動物界の美なるものは其形に於ては体形に美なる比例的関係ありて調和を保する美なる

形式に現はるれば也なり。
動物は独立せるものにして植物の如く地上に個着するものに非ず。又全部の依形の一部のみを見てするものに非ずして全部を示し、生活採ら識は下より上に向つて発達するが如き単純的方向を取らずして、生活の中心より八方に有する方向に對して発達し、生活運動によりて構造関係は活動するを示して個々の個人独立せるを現はすを以て植物に比すれば一層異常的なり。又動物の依形は最も発達したる人間に至て動物との間に植物は常なる差あるが如し動物と植物との間にも亦然り。而して植物と鉱物とにも亦斯かる関係あり。

植物は鉱物に對して既に生物たる生命の依附性を性的感覚を有することを知るべし。生命の依附性は動物の依形を見て初めて知るべきのみなれども、動物は意思の生物たるのみならず、感覚をも有する故に各時に有情のものなり。而して植物の間の着するの区別なれども両者の中間的性質を有するもの少なからず。例へば植物

は蚯蚓より草木の如きは、虫の来りて居るに
触れば纖毛にて是を捕ふる故に感覚を有
すと見るべく、又海薔薇といふ動物は
全然植物に似たる形体を具へたり。是れ等は
是れとも除外例と見做すして、未だ顕形又は中間形
とみなすべきものなり。但し善く学上に見るときは
植物は其の範囲に属するものとして、動植物に
きてのみ論ずる時は、其れを範囲とす。
動物は上述の如く生命あるのみならず精神
を有し、其の活動する機関を具へ且つ五官を有

す。
且つ精神を有すると、殊に高等動物に至りては
の体形に彰似せずと、既に其の外形に於て精神
を発表するとは人の同情を寄せ高き感情を起すに足る
り。又呼吸栄養の機能、排泄、生長、生殖、
苦痛、快楽の感覚等の諸作用は植物と比して
更に高等複雑の組織を遂げたるを謂ふ。植物に於て
は是等の諸作用は其の全部の作用に非ずして、各器
別器に存するに、動物に於ては
夫々分離して、各特殊の機関を具へ、加之器械も
その進歩せる動物に於ては事物を感知す

る器官を備ふることを要せざるなり。之有るが故に
動物の個性は植物以上に超越して主観を具ふ
る高等の上に属するものなり。自由に活動する
主観として動物は栄養物を求めて生活を探ぐれ
ども、植物は唯地上に固着して偶然の生活及
び食物に依頼するのみ。動物はその運動を以て偶
然の災害を避くることを得るのみならず、攻撃防
禦の器官を有すれども、植物は全く之
れを欠けり。偶〻薔薇の刺の如き防禦器官を有
すといへども極めて少数のみ。その随意の運

動にしてその武器を用ふるが如きは全く之を欠く。
動物の体形を見るに、下等なるものは正
形ならざるは姑く之れを措き、上等の諸
器官は職分に應じて夫々区別ありて統一せし。
(一)頭部は視官・聴官・嗅官・味官の器官を備
へ、(二)胸部は頸によりて首と分たれ、呼吸器
及び全器官の中心たる心臓を有し、(三)下体部
は排泄生殖の器官を有し、(四)運動器官の脚部
及び下体部に有りて対称的地位を占む。かくの如く
区劃の明かなるに従って動物は高等なる者たり。

一、そのく明なるに従つて下等の階級に属して従つて天然美として人に与ふる印象も益減ず。かの水母族の如き人の構動物は之を動物として見ればその形に於て色に於て非常なる美を有するに似たれども、むしろその美は植物的種類に属する結晶的性質を有するがためなり。もし植物にも有らずして動物なるを思ふ時は、人に対し動物的の美なる感を起さずして却て嫌悪の感を起す。之れによりて見るに所謂動物の美は純客観の関係より来るその美醜の外に対する感情の為めに純客観の影響せらるゝを知る。何となれば美に対する感情其の者は物に関する時は抽象的ならずして根本より具象的性格を有するを以てなり。

是に於て我等は動物に二方面あるを見る。一は天然美の形式にして、二は自動物の結合せる体形と之れの客観の運動によりて現はるゝ情況の形式是なり。然るに此の二方面の直観形式より生ずる美の感情に根本的影響を与ふ、或は団体たらしめ、或

之獨秘たらしむ。

一、下等動物に於ては必須の必要なる部分を有せざるものも少なからず。上に挙げたる四部分即ち首、胸、下部、運動器は高等動物の骨骼よりて之を研究せん。而して骨骼は脊柱を中心として組織せらるゝものなるが、此の脊柱を有せざるものあり。世に脊動物は之に属し、最も下等なるものを称して甚だしきは唯胃腸のみの動物と云ひ有せずして唯口はやがて肛門の用をなす腔腸動物の如きものあり。珊瑚虫、水母、等之

ドラザ族より進みて修に蠕形動物に至らむとするは運動器をなすもの昆虫類あり。これ等の下等動物は一部は植物的一部は鉱物的の観を有する。珊瑚虫又は貝類の如きは石灰質の殻を有するもの鉱物的の感を起さしむるなり。これらの殻は屡非常に美はしき色彩を帯び、その形も亦多く規則的にして結晶形螺旋状等を呈し鉱物の組織を聯想せしむれども、此殻の内に住む動物は反対に不美の悪感を抱かしむ。蠕形動物は甚だ下等なる階級

に属すれども、其体躯の有機的組織を去ること遠きを以て、美感を生ずること無く極めて甚し。之に反して一般多き甲殻類、例は海老、蟹等は寧ろ美を有する甲殻、補足、触角等の為めに美感を損すると覚えられず、呼吸と して例は鱶の如きに於ては醜なる感が滑稽の感に依りて聯想せらるゝものあり。

以上列挙せる諸類は水底若くは深淵に潜在する故、我々空中に呼吸する人間とは親み多からず、是れ第一に同情せしめざる

る一因なり。鼻類及び鯨族の如きも亦之れが為めに、不可解的謎語的乃至好奇的感情を惹起するなり。

二、水陸の界を為すものは昆虫なり。其形体上大体に於て甲殻類に類するものにして脊柱無しといへども、好要なる体の分節を具ふるものなり。即ち首、胸、下体部、足動器官を具ふ、されどその体節は極めて単調たらず。其は単に蠕動なる筋肉を以て運動せらるゝ故なり。例へば蚯蚓の如し。故に多数の昆虫は例

甲虫の如く、生活の破壊を防がんが為めに、
堅き甲殻を有す。殊に高等なる昆虫は時に羽を甲殻の
之れを有する。かくて体制上の差あるのみならず、
其美の根本的要素たる比例の調和、下位部は、
圓く肥大にして形状醜く、而も全身の半以上
を占め、之れを支ふる両脚は長く細くして而も
関節多く全然比例を失す。加ふるに頭部は
突起せる触角、突出せる眼、他の頭部にある
毒針等は皆美感を傷くるものなり。一層之れ、美醜
なるもの殺し、軽快優美なる(昆虫、蝶の如き)、或は

その擬人的建築(蜂蟻の如き)或は又装飾を要すること
等の美感より、補ふなる所は、更に醜悪なる
べし。之れと同じく昆虫は稍其機構を受くるに前
述の如き形態あるにより、其醜悪の感を起さしむ
は疑ひなきも、其の醜悪の感は、生活上動物の付与する特
質(刺す、咬む、振る、噛む)目的なる機関は、一層悪しく感ず
鳴くを以てするは稀なれど、動物は他の動物の感を惹起す
と同時に又凡てかすかなる感覚の器官なる為め、往々
印象を与ふ。之は直観する主観に対しては、殆ど
同情の感を惹きまい。然れども、此く見れば、昆虫の殺蚊

及び爬虫類の蚊、蠅、虻、黄蜂、蟋蟀、蚤、虱
等は人及び高等なる動物を襲撃する所のものなり。
三　蓋し世界の下等動物を観察すれば、彼等
は有脊動物の前身たるべきものと看做すべし。
然れども無脊動物より有脊動物、即ち脊椎動物の存在するに至るまでの
歴程は極めて緩徐にして、幾多の階級を経来
りて初めて完全なる有脊動物に達す。有脊動
物の最も下等なるものは尚ほ手に捕へものにし
て即ち魚類と手。魚類は又脊骨を具へたれども
未だ其の各部の区別完全ならずして空中に

生活する点に於ては更に高等なる所あり。
魚類に於ては体、首、尾の三部悉く特殊の形を
具備することなく、運動器は鰭のみ
体の形を有すれども高等に擬せる形を有するが如く、
高等動物の血液は赤色を呈する如く、魚の血液も赤色
赤色を呈すれども其の温度は高等なるものに於けるが如く
き温度を有せず。魚類の特質は其の冷血なる
にあり。又精神の活動力を示
すものにして、又動かすべき凸眼もこれを證
明す。魚類は比較的に低級の完全なる

なき精神は動きを有せずといへども、其軽快敏捷なる浮遊と銀色燦爛たる鱗片とは能く之を補ひ、その体形は極めて種々雑多にして大小長短錯雑して、円きあり棒状なるあり円錐形なるあり。軽みある運動と相待ちては滑稽的感覚を与ふるものなり。極めて愉快の感を起さしむるものなり。

四　凡そ天然は急激なる発展をなさず、必ず順序あり、階段あり。故に水棲動物より一躍陸棲動物を生ぜしめずんば、一層の中間に

位する所謂両棲動物の一群を生ぜしめたり。この種族は極めて多からずして、多少醜体を有せざるはなく、鱗あるは滑稽なるもあれども、寧ろ恐怖の感を起さするもの多し。この動物の代表的なるものとしては、蛇、鰐魚、蜥蜴、蛙等の諸族とす。

蛇の蜿蜒屈曲して、又かたき感を起さしむるは、その危険なるを思はしむるのみならず、柔軟なる円形を描きて運動するも、猶はらず其の細長なる体のいづくよりか観よ運動

十ノ廿（七佐屋製）

器官を有せざる對照と、而して無意味なる恐ろしく
凝視する眼、電光の如く色ハ閃々、而の如
くなる眼、舌を有するに在り。鯛、鮒、鰻ハ如何
は長くして尾のある体を短くしたる世の蛇は如何な
る御との不清なると、皮膚の極めて醜な
るにより人ハ美感を起さしむる能はざる所以な
り。蜥蜴族の如きは聊か優美の感を與ふる
ことありと視らるれども、その大なる例
は「クロコダイール」の如きはその危険を證せ
しむ色と共に、その巨大なる醜形は如何ばかりぞ

恐怖の念を起さしむ。蛙族に至りては[illegible]跳
躍に適する長き後脚とその鳴声は滑稽の感
を呼ぶ。然れども蝦蟇は惡感を生ず。その階級
に屬するもの、純水棲動物と異る點なきもの
五六のもの、みを存すると見れなり。
五、水陸両棲動物より進んで更に完全なる
域に至るは空中に生活するものなり。而して
最も下等なるを鳥類とす。鳥類の陸棲する
有脊動物中の最下等なるもの即ち最も両
棲動物に近きを示す一族は[illegible]卵の特性

を有することを見るなり。　鳥類は前肢羽翼となり、魚類の鰭と對照すれども、彼れに存せずして始めて存する所の者は後脚に爪あることなり。かくの如く二段の進歩を示すものは、首の自由に空中を飛行する翼によりて生存すると、肺によりて呼吸するとの二事なり。而して前生存の鳥類との區別を表示するものは、兩も調節ある發音を為すことは是れなり。其の精神活動の力あることを證する一現象なり。　鳥類たるのみにて、一定の方法によりて内部精神を發表するを得るに至れるなり。

而して鳥は空中及び陸上に生活するものなるが、水上に生活するものあり。故に三種の生活状態に從ひて、その運動形式の差に多少あり。空中を飛行するものは、その輕快自由なる翱翔と調節ある羽翼の運動によりて優美なる印象を與へ、その大なるもの、例へば鷲鷹の如きは、その獰猛なる觀念と運動の優美なることと結合して一種の崇嚴なる感を起さしむ。又水上に於ても、例へば白鳥の如きは、その水上に遊泳する

附は満帆風を孕めるに似たる翼を具有せしく伸びやかなる其首、雅麗なる姿ならずとも、其の一度水を去りて陸に上るや、その不格好なる不器用を極めて甚しおかし。之に反して陸上に住する慢なるものゝ、例へば駝鳥の如きは、その飛ばむとする附は極めて不格好たり。身体の各部及び全部に於て比例を失せる形を有するものあり。例へば鶩、鴻等の如き是れなり。

鳥類の他の下等動物に優れる点は其の血液の赤色を呈するのみならず、暖きをも有する

ならしむ。是れ人をして他の下等なるものに比して非常なる同情を有する所以なり。又多数は人の飼養する所となりしより更に視覚の美を加ふるのみならず、更に美感を強うするに二大要素あり。一は其の翼にして、二は其羽毛の美麗たり。

六 進化発展の原則として、進歩は形に於て顕はれ、而してその発展の形式に於ては人は最高等階級に属するも、その肉体及び精神上の点に於て低き階級のものより劣れると

普通とす。故に鯨類は有蹄動物に属するものなれども、体の組織及びその智能に於ては多くの懸隔と大差なきが如く、哺乳動物に至りても亦同様の関係あるを見るべし。哺乳動物中には其体に於て大に異なることを数多にして、体躯に於ては殆んど魚と均しきものあり。鯨の如き即ち是れなり。哺乳動物は其名の示すが如く乳を以て養ふものにして、鳥類の如く卵を産することなく、母体同形の子を産するを普通とすれども、然れども其下等なるものの例外には鯨の如きに至り

ては其体形組織は両棲動物及び爬虫類動物と大差あることなし。但し海豹等に於ては甚だ頭の形はやゝ陸棲する哺乳動物に近し。然れども大体に於て哺乳動物の水棲するものは其体の巨大なると、その不恰好なると、智能に欠けたるとは、人々をして親しみの念を起さしめずして却て奇怪の感を覚ゆ。その肉は其に於て食料を兼ぬるが故に、人の同情を得ること難し。

七、水棲哺乳動物の最も普通なるは河馬・犀等の厚皮動物とす。彼等は巨躯にして皮膚

及び骨學上の骨骼の突起に於て鯨族に関係し其骨骼及び其巨大なる点に於ても陸上哺乳動物中稀なる象に関係あり。即ち水陸哺乳動物の中にては信ずるものなり。此有史以前の太古的体形を有史以後の今日まで何等の変態を蒙らざるものなるとして、一種醜き感を起さしむ。然れども象の如きは其智能あると温順なるとより醜は減じて滑稽の感を起さしむ。豚の如きも亦同情をひくことすくなからざる動物なるか、その狂暴なる時は巨大にして強力なる象は[illegible]

十ノ廿（上佐屋製）

更に懐しき念を起さしむるものなり。

八、河馬、犀族が水陸の中間的なるが如く、鳥類と哺乳動物との中間に在る蝙蝠、栗鼠、の如き、及び原始動物より進歩し来れる蟻[illegible]、熊、木狗、カンガルー乃至海狸、土龍、鼠、豪猪、箭猪の如き異常的形態に属するものあり。而して殆んど全く其体形に於ても生活運動並びに動作の方法に於ても其種の発生を前世界に在りしが如き前世界的の奇異なる姿をそのままにして、一般に醜なる素質を具へた

り。

珍奇異なる点は無けれども、其趾及び爪に於て彼等と似たる二三の動物あり。熊の類、狸、黄鼬、穴熊、猫、野猫、豹、虎、獅子、の如き是れなり。豹虎獅子等に於ては何れも優美なる弾力性の体形を有し其多くは美しき毛彩を有するにも拘はらず体大なる動物の強固と跳躍力とに現はるゝその獰猛なる性質とありて吾人をして一種恐怖の念を起さしむ。この吾等は其の運動にもありて優美なる体あらんも獲物に対せんとするものを欺き実に如し

十ノ廿（七佐屋製）

て襲ひかゝる反対的動作を為す。故に吾人に穏かならずして感は欺偽好計の感を含みて、優美の印象は変じて恐怖の印象となる。

九、直接之れと反して、従つて之れと自己の敵とするものを反噬動物とす。この動物中にも前者は自衛的体形を具備せしむるものあり。麒麟、駱駝の如き是れなり。又水牛、家畜牛、鹿、綿羊、山羊、等の如き諸種は尾す。此等は甲に又蹄二つに分れ、駱駝族を除くの外は皆頭に角を有す。総じて草を求めて之

草を噛みて肥えたる傾向あるより従って体は短く飽き感を与ふる。然れども古来の称歎の如きこれらのものは山野を自由に馳奔すべき感極めて乏し。然れども鹿類は又前頭に防御の角を有する事を有し、和するに首短めて長く前に突く頸に接して全体を構造比例を失せり。故に一般に就ては二三の軽快なる運動を為すものあるにも拘はらず全身の調和を欠けり。

一〇、之れに反し、騎の馬の観に於ては全体の比例調和を保てるなり。即ち前後の重力具はる。体の後部は円形をなして前部と殆んど等しき力及び重さを有し、中央部は美しき傾斜をなして凹み、自然に弾力を帯びるに適せるが如くなれり。首は緩くして動く耳或は穏かに怜悧らしき或は慨ふるが如き眼を具へて、優美にして而かも力ある胸より発せる自由に動く細き頸は波打つ鬣を以て飾られたり。而して後部には長き尾ありて、前後相対照し体を支ふる四肢は曲線美にして丈夫なる力の発露せるを示して、而も運動軽快敏捷なり。要す

つ、馬の全形は力と美との相平均して調和せる
ものなれ、他の動物之れと比すべきもの
全く無し。然れども猿類に似て全く然ら
ざるものもあり。例へば驢馬の如き大体に於て
其体形馬と甚だ大に似たる所あれども、其構造の
美に於ては大に劣りて寧ろ滑稽的なり。甚長
くして垂下りたる耳、比較的に大なる首、光
沢なき尾、魯鈍の遅なる性質は総合して流
麗勇壮敏捷なる馬と寧ろ対比をなせり。

一二、

動物中最も発達したるものは犬

なり。その体形の美なるは勿論なれども、之
れよりも寧ろ忠実、怜悧にして恩を知る性質
は人の同情をひき、又人を喜ばしむ。其穏に
して物いふ如き眼、喜怒哀楽を表はす尾
ある躰及の表情は動物の多くに見ざる強さに
発達せるものなることを示せり。犬の
美特性を有するも、りしば勿論人間社会の感化
に基づくものなり。然るに同様なる狼狐の如
きは全然犬の有する特性あることなく、
獰悍なるにも残酷にして狡猾なり。而して犬

の如き個性を有せざれば。

一二、最後に最も高等動物なる人間の外観上最も滑稽的階級を形作る動物属を考察せざるべからず。即ち猿なり。猿は吾人の観る所の類似の点よりして却て滑稽の感を起さしめ、吾人は之を醜とする印象を与ふるものなれば。猿と人との同種なることを聞いては全く論ずべき要なし。吾人は之猿の人に対して占むる美学上の地位につきて観察すれば足りぬ。猿の形果して人より同情を寄せらるるや、野性の人の有ゆる欠点とする

亜弗利加・亜米利加・濠太剌利亜

許を委ねられたるを有せん。而も猿はその特色とするが故なり。斯の如き貪慾、不信、淫乱、嫉妬を寓して却ふの醜悪は剰戻せる滑稽の至れる模倣の挙動を以て滑ぶべからざる悪感を与ふるものなり。（猿の模倣術動は毫も目的なく解することあるべくして起るものなり。）要するに猿は人の消極的方面を代表し、老人的未熟の弊病を絶色彩を帯びる世界の偶像なり。理論上猿は人体構造の根本要素を有すれば明かなり。アフリカ、アメリカ、アウストラリヤ等の野

蓋人と比較せば其の猿との区別を展列するこ
と極めて困難ならず。　直立して歩行せ
ると、大体の形状の殆んど相等しきと、
手に其の手足の指の極めて似寄ることと耳は稍人
と猿と相等しきを同じうするものなる
り。然れども更に精密に観察すれば、二者の間
に大なる差違あるを発見すべし。猿も直立して
歩行するを得ざるにあらず。同時に手足四肢を以て
く樹木に攀登することを得べし。故に猿は二手
手を有するといはんよりも、四手を有すと言

縮

ふを適当とすべし。　然し猿の足とすると云
へる構造は歩行するよりも攀登するに適当なり。
又踵なく、膝弱く、足弱く、背は曲り、多く
は尾を有す。猿には頭の構造に於て容積小、胸
は狭し。極めて強き歯を有する等、孰れか
人と異なる所あるものなり。　分類上より見れども
宜しく差違ありて、其の差異に於ても無論
なり。畢竟猿は人の醜陋なる模型たるに過
ぎず。

ざるなり

十ノ廿（土佐屋製）